

*3. 泥炭とは、枯死した植物遺体の生化学的分解が十分に行われないまま有機質土化した状態で、石炭生成のごく初期段階をいう。肉眼で容易に識別可能な植物繊維を多量に含み、土壌学的には有機質含有量50%以上、工学的見知では土中に土砂や火成降下物など無機分を含むことを考慮し、有機室含有量20%以上を泥炭として扱う。

地盤

・山地

各種岩盤類が基盤を形成し、その上位を粘性土や岩盤類由来の風化土砂が被覆している。火山地では熔岩や火山砕屑物、その風化土砂と火山泥流堆積物などが主体となる。

宅地利用に際しては、造成による地盤状態の改変を考慮し、自然地盤の状態と人工的な盛土部分とのバランスに配慮した慎重な対応が必要である。

・丘陵地

山地に比べ起伏量の小さい部分。主に山地周縁や沿岸部に分布する。基盤構成はほぼ山地に準じるが、火山性の場合には火成噴出物や降下物が被覆する。

宅地利用に際しては、造成による地盤状態の改変を考慮し、自然地盤の状態と人工的な盛土部分とのバランスに配慮した慎重な対応が必要である。

・台地

岩石や砂礫で構成される段丘面で、火山起源のロームが被覆していることもある。

戸建住宅を想定した場合、概ね良好な地盤を形成していると言えるが、段丘面の形成年代によっては、ロームの被覆量や表土の成層状態が異なるため、注意が必要となる。

・低地

河川流域や開析谷、および沿岸部に分布し、いわゆる沖積層を成す。

河川によりもたらされる土砂や浸食二次堆積土を主体とし、砂や砂礫、砂質シルトなどを混在することが多く、泥炭層が形成されていることもある。

住宅利用を考えた場合、軟弱地盤を形成していることが多いため、基礎形式の選定は特に慎重に行なう必要がある。なお、泥炭層分布域では泥炭の特殊性を十分に考慮した判断が必要となる。

参考文献

「アーバンクボタ24 特集-北海道の特征的土壌」(発行：株式会社クボタ)

「地質と調査 通巻第82号/1999第4号 連載29-北海道の地盤」(発行：株式会社土木春秋社)

「日本の特殊土/土質工学ライブラリー10」(土質工学会 編)

| [都道府県別地形・地盤解説 全国地図へ](#) |

作成者情報

Copyright(C) 2005 [GEOTECH Co.,Ltd.](#) All rights reserved.

最終更新日：2005/06/11